

森本美由紀さんとは、80年代に雑誌の仕事をご一緒した仲でした。電子メールはもちろんファックスもバイク便も普及していなかった時代のこと。直接お会いして打ち合わせたり原稿を届けていただいたりする中で、いろいろお話しする機会もありました。

80年代初頭にデビューした森本さんは、最初はペン画のイラストを描かれていて、色づかいもポップ。今日来場されている上田三根子さんにも通じるような、どちらかといえばアメリカンテイストのかわいいイラストで人気がありました。

けれどもそれだけでは飽き足らなかったのか、彼女は80年代の中頃から、墨と筆で描くモード系のイラストに挑戦し始めます。50～60年代にディオールやヴォーグ誌で活躍したフランスのファッション画家、ルネ・グリュオーの影響もあったのでしょうか。\*マークの下に「g」と書いたグリュオーのサインを彷彿させる、\*に「m」のサインを使い始めるのもこの頃からです。

もちろん、単にグリュオーに倣っただけではありません。森本さんの根底には彼女が少女時代に愛読した一条ゆかりや陸奥A子といった70年代の少女マンガの世界がありましたし、現代を生きる女性としての新たな感性もありました。そうした要素を織り交ぜながら、彼女はフランス風のモードなスタイル画と日本独自の「かわいい」感覚を融合した、まさに森本美由紀にしか描けない独自の世界を確立していったのです。

忙しい仕事の合間を縫って、彼女は何枚もの習作を描いていました。発表しないまま捨ててしまうのはもったいないので、当時、製本に凝っていた私が一冊に綴じたこともありました。今にして思えば、あれが森本美由紀の初画集ですね。

当時、そこ(講壇の正面)にある雑誌『MINE』のカバーイラストのように墨の線画に色をつける場合、どんな色調にすべきかと、彼女に相談されたことを覚えています。それまでのポップな色使いでは、しっくりこなかったみたいです。結局、彼女は色を捨てるというか、色を使わず線だけを追求していくことになります。

同じ頃から彼女は、学生時代にやっていたデッサンやクロッキーを再開し、イラストに活かしていきます。モデルにポーズをとらせて描くことは画家にとっては普通ですが、イラストレーターは資料写真などを見て描くことが多く、森本さんもそうしてきました。けれども生身のモデルを見て描く方が、線がより生き生きとしたリアリティを持つことに、彼女は気づいたのだと思います。

墨の線だけを使い、モデルを見て描くようになってから、彼女のイラストは俄然、輝きを増していきます。色がないのに色が見え、輪郭がない部分にも線が見える。森本美由紀の芸術は、ここに完成したといえるでしょう。

90年代に入ると、彼女が描く線はますます冴え渡ります。墨一色の線画が、逆に他のアーティストたちの色彩イメージを膨らませたのでしょうか。皆さんもよくご存知のマークスのダイアリーやピチカート・ファイヴのアルバムジャケットなど、グラフィックデザイナーやファッションメーカーとのコラボレーションも増え、海外のファッション誌からイラストを依頼されて国際的な評価も高まりました。

偉大な業績の一方で、彼女は人間的にもとてもチャーミングな人でした。その片鱗がうかがえるのが、彼女の分身ともいえるタマネギの「タマちゃん」というキャラクター。元々はイラストの完成が遅れたときなどに原稿袋の片隅にお詫びの一言と共に描かれていたのですが、やがて一人歩きしていろいろな雑誌に登場するようになりました。今回の展覧会に合わせて『タマちゃん the Onion もうひとりの森本美由紀』という書籍も刊行されました。ファッションイラストレーター森本美由紀の人間味あふれる側面にも、ぜひ触れていただきたいと思います。

私が森本さんと仕事をさせていただいた80年代は、雑誌文化がクリエイティブだった最後の幸せな時代だったのかもしれませんが、彼女が亡くなってしまったことが、今日の雑誌の衰退を象徴しているかのようにも思えます。

けれども、彼女の人間味に魅せられた多くの友人たちの尽力と弥生美術館さんのご協力を得て、こんなに立派な回顧展を開くことができました。これを見た若い人たちの中から必ずや第二、第三の森本美由紀があらわれて、雑誌を盛り上げていってくれることでしょう。雑誌文化再興の起点となるかもしれないこの記念すべき場に、森本さんがいないことだけが残念でなりません。

.....

◆山田五郎 やまだ・ごろう(編集者・評論家)

[プロフィール] 1958年 東京都生まれ上智大学文学部在学中にオーストリア・ザルツブルク大学に1年間遊学し西洋美術史を学ぶ。卒業後、(株)講談社に入社『Hot-Dog PRESS』編集長、総合編纂局担当部長等を経てフリーに。現在は時計、ファッション、西洋美術、街づくり、など幅広い分野で講演、執筆活動を行っている。著書に『知識ゼロからの西洋絵画史入門』(幻冬舎)など。